

地域との連携方法や教員養成への成果と課題を学ぶ(教職教養課題特講での小規模校訪問)

大学院 (教育実践高度化専攻)・橋本 巖

1. FD 活動(参観授業)の概要

本報告が基づくのは、平成 30 年 2 月 7 日(水)1 限に共講 A11 講義室で開講され筆者が参観した「教職教養課題特講」(教育学部、現代的課題科目群に位置づく)の授業である。FD 活動としてのテーマは、「学部教育における地域との連携の方法や、教員養成への成果と課題について学ぶ」であった。具体的には、授業者の鴛原進教授から、平成 28・29 年度 2 年間の愛媛大学教育改革 GP「愛媛で教員になるモチベーションを高める教育内容・方法の充実」等の一環として、本授業「教職教養課題特講」で実施された、教員を目指す学部生による県内小規模校訪問の概要とその評価についての報告を聴講した。

愛媛大学教育学部にとって「地域で活躍する人材育成」とは、愛媛県の教採を目指し突破することとほぼ対応する。その一方で現状は、県外からの入学者が半数近く、ミッションの再定義での目標クリアが容易でないこと、また、教育実習が近づくにつれて重圧や不安を感じる学生がある程度存在すること、等が指摘されている。ただし、愛媛県の教員採用見込みは今後しばらく「良好」であることから、「私につとまるのか」と不安を抱く学生の動機づけを支え、また「愛媛のよさ」を実感してモチベーションを高め、維持してもらうことが重要になる。

そこで、鴛原先生らのプロジェクトでは、県内各地(島嶼部、山間部、都市部)の各学校種での教育の実際を知ることが一番であるとの考えをもとに、具体的には山間部・島しょ部(僻地)の「小規模校訪問」を実施して、愛媛の教員を目指す学部学生の動機づけ喚起を目指すことになった。本プロジェクトでは平成 28, 29 年度、島しょ部小規模校など(上島町弓削小、生名小、伊予市下灘小)の訪問に要するバス、フェリーの経費を賄うことができた。

筆者は、「山間部・島しょ部の小規模校には教育の原点がある」との鴛原先生らのご指摘を、本報告書では何度も考えた。

教職教養課題特講での学校訪問の参加者は、30 名から 90 名程度だった。大人数の大学生がまとまって訪問する形は、小規模校の教職員・児童にとって非日常であり、また、学生側の活動にも制約があろう。しかし、訪問中の活動は、通常の授業の参観、研究指定により開発された小規模校独自の学習法・指導法の参観(ICT 活用、子どもらの表現力向上のための話し合い等)、地域・季節行事での児童との交流、校長からの小規模校のよさに関わる講話、などの多様な内容が用意されていた。

校長講話(弓削小)では、小規模校のメリットとして、①一人ひとりに活躍の場が与えられる、②きめ細かな教育、③あたたかな雰囲気(校内外)、などが触れられた。少人数であることが、子どもに慕われ、寄り添う「教師と子どもの距離の近さ」を生んでいる。教育的愛情であろう。また対人・社会的環境の変化の少なさから来ると思われる、「表現力」「学習意欲(主体性)」などを高める取り組みなども解説され、「地域性を活かし、子どもの可能性を広げられる教員になって」という「エール」もいただいている。訪問を終えて帰り際、子どもたちは最後まで見送って手を振ってくれていたという。

本プロジェクトの取り組みは、大学側と受け入れ校が綿密に打ち合わせ、また現場の心配りを頂いていたことが伝わってくる。さらに、愛媛新聞等でも報道され、大学と地域の両方が活動をアピールし達成感を得ている。

2. 受講者のアンケート・感想からみた教育体験活動の多様な意味と動機づけへの影響

(1) 小規模校訪問の効果

島しょ部(あるいは山間部)での小規模・へき地校訪問は、教育学部のカリキュラム上でも貴重なものであろう。従来までの学部段階の教職課程では、4 年次の応用実習で特に希望した者だけが、小規模・へき地校で実習が可能であり、また希に「ふるさと実習(出身校)」が小規模校であった場合に限られよう。

従って、教職教養課題特講が提供した小規模校訪問は、学生にとって十分意義・手応えのある体験だったことが、感想・アンケートからうかがえた。授業後の「教員になるモチベーション」に関するアンケートでは、約65%が意欲が「高まった」、約34%は、もともと高かった意欲を「維持している」と回答した。小規模校訪問によって意欲向上したと答えた受講者が、どのような観点でその体験を肯定的に動機づけに結びつけたのか、探究が望まれる。学生による訪問体験に関するプレゼンテーションなども可能であれば興味深い。

さて、意欲が下がったという学生も、「教員にはなりたいが、あの場所で生活できるか不安(生活環境の問題)」、「以前から特支の教員を目指しているが、通常学校の教員もよい(校種変更)」などの内容だった。これらは、教員志向自体の否定ではなく、教員として現実的に将来を選択しようとする上で、出会った体験を一つ一つ自分の将来の現実味のある選択肢としてどうか、と真面目に自問するが故の「揺らぎ」であるとうかがえる。アイデンティティをつかもうとする青年の、きわめて健全で前向きでやや潔癖な「悩み」であり、筆者は、このような学生の揺らぎを軽視せず、真摯で目先の利害にとらわれないキャリアカウンセリング的支援が必要であり、また相互に開示し合う発表、懇談も有意味と考える。

さらに言えば、先の意欲が一時的に低下したという学生の揺らぎ(校種変更の自問)は、この学生がこれまであまり参観していなかった通常学級の環境や「よさ」を訪問先で見たためであり、特に小規模校だからではないかもしれない。このような感想をいただく学生には、地域連携実習等での多様な体験活動を勧めることも有効だろう。

(2) 導入期の体験活動による教職への不安

ここで、筆者の教職大学院の授業(「子ども理解の心理アプローチ」)で質問紙を作成し、法文学部生(主に1回生)が受講する教職科目で「教職に就くにあたっての不安」について実施した調査に触れる。教職の実務的内容と、教員採用試験受験、教育実習等に関する内容について質問すると、教育ボランティアなどの経験有無にかかわらず、生徒指導や特別支援などの現代的課題に関することに不安がより高かった。また、特に児童生徒との関わりに関する不安は、ボランティア経験者の方が

非経験者よりも高い。ただし今回は、まだ地域連携実習に数回参加しただけの者や、震災ボランティア等の非学校体験も経験に含めている。おそらく彼らは、そのような地域の現場を体験する社会参加を初めてに近い形で味わい、人々の多様な反応に新鮮な感動と戸惑いを感じたのだろう。それは、「人(子ども)と関わる」という、学校にも当てはまる普遍的な課題を自己課題として意識したが、実際に成功裡に対処したことが少なく、うまく対処した身近な教員の実例も知らない、などが要因で、経験者の方が不安を強く感じたのかもしれない。このような不安等の受け止め方の面からも、教員志望者への支援を考えたい。

3. 小規模校訪問と類似する教育活動から見た改善点

小規模校訪問と似た教育活動として、①教職大学院での小規模校実習と、②地域連携実習(学部)での小規模・へき地校の学習支援がある。①は、教師になることがほぼ確実な教職大学院生が、選択科目として2週間程度へき地校に滞在し実習する科目である。また②は、県内の小規模校からの要請により、夏休み等に数日間宿泊したり、特別に交通手段を手配していただいて通い学習支援するボランティアである。これらは、小規模へき地校の教員数の制約や、大学や学習塾等が近くにならない等の地理的制約を緩和し、青年教師と子どもが学び合える貴重な機会となる。まさに子どもらとの近い距離を実感し、地域から歓迎され、学生も有用感・効力感を実感する。小規模校訪問等で教員として働く希望を強くした学生らには、このような応分の信頼を受けて実際に自己効力感を少しでも獲得できる機会を積み重ねてもらうことが不可欠と思われる。小規模校の方がそのような実感は深くなるか、松山近隣校でも十分だろうか。また、すでに課題特講でも取り入れているように、地域の熟達した実践家(教師)に、講話だけでなく助言や手ほどきを受けられることも、より高学年では重要だろう。

一方、小規模校では、厳しい環境・境遇にある子どもたちにも権利として教育機会が保障されねばならない故に、それを担う者に代わりがない責任の重さを直観するかもしれない。「小規模校に教育の本質がある」とはそういう意味も含んでのことではないかと感じた。